

令和四年度入学試験問題 国語（五十分）

二月三日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は13ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督かんとくの先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

雨の降る放課後は、思わずほうきを掃く手を止めて、掃除のために開けた窓から、外の薄灰色の世界を覗きこむ。運動場の向こうにある住宅街の家々の壁は、晴れの日は白く光り輝くのに、雨になると途端に色を失くす。こんな雨の日は、何かを思い出せそうな気がする。私は同じような雨降りの日を、生まれる前に何度も体験してきて、今その瞬間を A 思い出せそうだ。でもじっさいは何一つとして思い出せない。落胆して、ほんやりする。耳にまとわりつく雨の音を、無視もできずに。

またほうきを動かすがさつきから同じ場所ばかり掃いている。教室の床は、油を染みこませているせいで茶色く、むっとした匂いが立ちのぼり、何度掃いてもきれいにした気になれない。

「木村、教室終わったら、二階の階段も頼む。運動場から入って来て、玄関マットで靴の泥を落とさずに上がった奴がいたみたいで、足あとがくつきりついてるんだ」

「はい」

教室のドアから顔を出した担任の指示通り、ほうきを持って校舎の西階段まで移動した。階段は確かに汚れていて、いくつかの段には雨に濡れた靴跡がついている。私は階段掃きを始めた。一段掃いては隅に集めたごみを、また一段低い階段へ落としてゆく。

昼なのに明かりをつけないと薄暗かった教室とは違い、廊下は天窓があるおかげで、雨の日でも明るく、白っぽい。踊り場を挟んで曲がりくねる階段のラインと高低差が美しい。うつむき、視界で揺れる髪をときどき耳にかけながら一段一段掃いていると、男子が下の階から駆け上がってきて、一瞬踊り場の壁の大鏡に映ったあと、私の傍らを通り過ぎて行った。一番下の段まで掃き終わり、踊り場のほこりも一緒に集めると、教室に戻り、ちりとりを取ってきた。でもアルミ素材のちりとりは長く使ううちにいびつになり、床との間に隙間ができ、がたつき、ほうきを持っていない方の手でちりとりを後ずさりさせながらほうきを動かしても、床には回収しきれないごみが残る。ごみのなかには女子の誰かの細い黒のヘアゴムも混じっていた。まだ使えそうだけど、もちろんひっぱり出してまで使う気にはなれない。

仕方ない、別のちりとりを見つつけよう。ごみを隅に集め直したあと、ほうきとちりとりを壁に立てかけて、一階へ続く階段を

降りたら、階段のコンクリートの手すりの裏側、掃除用具の入ったロッカーが置いてある死角の三角地帯に、誰かの黒い頭が見えた。へんぴな場所に、特に用も無さそうなのに、ロッカーを開けるでもなく隠れるようにして突っ立っている。

あんなところで何をしているのだろう。なんとなく足音をひそめて階段を降り、近づいて手すりから少し顔を出して見下ろす。彼だ。白い便箋らしきものを読んでいる。途端に心臓が跳ね上がり、手の内側がじんわりと汗で湿る。私に気づかず彼は

Xに手紙を読んでいる。一枚読み終えて、また次へ。私の位置からは頭の後ろしか見えず、彼の表情は分からないが、集中力の鋭さはB伝わってくる。黒々とした頭頂部、浅黒く太い首を取り囲む詰襟の白く細いライン。また一つ階段を降りたが、彼は気づかず、気づかれたら困るのに気づいてほしくて、私は残りの階段をわざと足音を鳴らして降りた。

振り向いた彼は素早く手紙をポケットにしまい、首を垂れて私の行き過ぎるのを待ったが、私が彼のすぐ側まで近づくと、驚いた表情で顔を上げた。

「あれ、西村くん？ こんなところで何してるの」

ロッカーの扉を開けながら、いま気づいた風を装う。

「ああ、えーと、携帯を見てた」

「そっか、だからこんなところに隠れてるんだ。校内で見てるのがばれると、先生に没収されるもんね。にしても、もうちよっと場所を選んだ方がいいよ。だって、あれ」

私は階段の向こう、廊下の奥にあるドアを指差した。ドア上の札には、「職員室」とある。

「ああ……。そうだな」

ほんやりした瞳で首をひねり、職員室を眺めたあと、彼は口をつぐんだ。②ばればれの嘘をついたんだから、もうちよつとあわてて、色々言い訳してほしい。もしいまの立場が逆で私が彼に矛盾を指摘されたら、私はもつとうるたえるだろう。彼が好きで、怪しまれたくないから。でも彼は、何も言わない。私が彼をどう思おうが、どうでもいいのだろう。

私はロッカーからちりとりを取り出すと、何も言わずに彼に押しつけた。

「ん？」

「ちりとり、やって。先生に階段の掃除を頼まれたんだけど、一人だけでほうきとちりとりの役目をするのは大変なの。だから、

手伝って」

私がまた階段を登り始めると、少しして、後ろから彼の足音が聞こえた。彼が私についてくる。彼が少し目線を上げて、ひらつくスカートから伸びる私の脚を、ちらとでも見てくれたらいいのに。彼は私の脚をどう思うだろうか。③私が彼の身体の細部に示す関心の十分の一ほどでも、持ってくれたら。

踊り場に着くと、彼は中腰ちゆうごしになってちりとり底の床につけ、私の掃く速度に合わせて、少しづつ後ろへずり下がった。私はゆっくりと、C 丁寧ていねいに掃いた。一人で掃除していたときよりも、ごみが床を移動する音や、ほうきの先が床にこすれる音が耳につく。

つい最近、クラスメイトに志望大学を訊かれて、彼はD、東京の最難関レベルの大学名を口にした。あつという間にクラス中に噂うわさが広がった。他の生徒は落ちたときにかっこ悪いからと、本命の大学は内緒ないしょにするのが普通ふつうなのに、彼が簡単に口を割ったせいだった。私も驚いた。あんなに用心深そうな彼が、自分の情報を自ら他人に与あたえるなんて。

案の定、クラスメイトたちは、自分の不安、やっかみもあつてか、大した自信だなど彼を揶揄やゆしたり、彼の志望大学のあだ名をつけたりした。何を言われても彼は笑って受け流していた。④その笑顔を見て私はさびしくなった。そうだ、なにも驚くことはない、気にしなくて当たり前だ、彼の心はもうこの高校の教室には無いんだから。次のステージに上がる目標だけを見据みすえているから、いま現在の生活は、彼にとっては既すでに過去なのだ。

私はどうすればいいだろう。いまなら登校すれば彼に必ず会えるが、卒業し大学に受かったら、毎日会えないどころか、彼は東京へ行ってしまう。

家で勉強もつぱんきょうしているせい、最近の彼は疲れつかききつて、いつもよりさらに覇気はきがなく、言葉少なだった。以前は休み時間になると友達と教室の隅で話していたのに、いまではずっと一人で黙々もくもくと勉強していた。こうして近くで見ると、以前よりだいたい痩やせたのがよく分かる。

「たとえ」

つぶやきが無意識のうちに声に出て、うつむいていた彼が顔を上げて、⑤ げげんげげんのような表情で私を見た。まずい、どうしよう。変に思われる。

「ごめんなさい。変わった名前だよね。よく言われるでしょ、めずらしいって。たとえば、っていう名前」
「うん」

彼は再び伏し目がちになった。

「どういう意味なのかな。ご両親は、どうしてこの名前にしたんだろうね」

「知らない」

「本当？ 普通聞かない？ 自分の名前の由来とか」

「聞かない」

名前について触れられるのが嫌なのか、たとえば眉根をよせ、E口を閉ざす。しまった、きつと今まで名前のことさ
んざんからかわれてきたから、もううんざりしてるんだろう。考えてみれば、クラスは同じでもほとんど口をきいたことのない
私に、彼が自分の名前の由来を教える義理なんかない。ああ、初めての会話なのに。また手の内側に汗がにじみ、ほうきをぎゅつ
と強く握りしめる。

「でも、いい名前だよね。」

「え？」

「意味ありげで、謎めいていて、でも響きがきれいで。すてきな名前だなんて、一年生するときから思ってた。でも一年生のと
きはね、たとえばのたとえだと思ってる」

自分でも何を言っているか分からないけど、口が止まらない。

「イグザンプルの方のね。でもこの前、西村くん、国語の授業で朗読したでしょ。そのなかに、^⑦違う用法のたとえが出てきて、
もしかしたらこっちの意味なのかもしれないと思ったの」

彼はちりとりを持ち、中腰のまま、私を見つめている。

「ほら、あの文章だよ。たとえば五千年の歴史が、どんな誤りを犯していても……」

その先が思い出せず、私が口をつぐむと、彼は几帳面なしぐさでちりとりの底を床に軽く打ち付けて、掃き集めたごみを落
ちないように奥側へ寄せた。

「忘れちゃった。えーと、ごめんね、変なこと言って」

「別に、変じゃない」

「え?」

「名前について、そんなに色々と考えてもらえたのは初めてだ」

言葉の続きを待ったが、彼は何も言わず、もうごみが奥に寄っているのに、また二度、ちりとりを床に軽く打ちつけた。顔を覗きこむと、驚いたことに、彼は恥はずかしげな表情を浮かべていた。

「なんでもない。ありがとう。それじゃ」

それだけ言うと彼はちりとりを持ったまま、教室のある三階へと続く階段を、振り向きもせず足早に登っていった。後ろ姿を見上げていると甘あまくて淡あわい、ほのかな酸味の桜色のお酒が、泡あわをしゅわしゅわ立てて胸に満ちてゆく。

なんで私、お礼言われたんだろう。彼の名前についてしつこく考えたから? よく分からない。でもすごくうれしい。何気ない会話のやりとりでこんなに幸せな気持ちになるなんて、生まれて初めてかもしれない。

(綿矢りさ「ひらいて」より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の A E に適する語を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あっけらかんと イ ひしひしと ウ ことさら エ まざまざと オ かたくなに

問二 本文中の X Y にはある四字熟語が入ります。次の に漢字をあてはめてその四字熟語を完成させなさい。

心 乱

問三 — 線部① 「途端^{とたん}に心臓^{しんぞう}が跳ね上がり、手の内側^はがじんわりと汗^{あせ}で湿^{しめ}る」とありますが、このときの「私」の気持ちを四十字以内で答えなさい。

問四 — 線部② 「ばればれの嘘^{うそ}」とありますが、

(1) 「嘘」の内容を二十字以内で答えなさい。

(2) その「嘘」が「ばればれ」であること理由を二十五字以内で答えなさい。

問五 — 線部③ 「私が彼^{かれ}の身体の細部に示す関心」とありますが、「体の細部」の具体例が述べられている部分を本文中から三十五字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問六 — 線部④ 「その笑顔を見て私はさびしくなった」とありますが、「私」はたとえの笑顔からどのようなことを読み取って「寂しく」感じたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問七 — 線部⑤ 「けげんそうな表情」とありますが、「たとえ」がこのような表情をした理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名前を呼び捨てにされたことが、不快だったから。
- イ いきなり自分の名前を呼ばれてびっくりしたから。
- ウ 名前を知られているとは思わなかったから。
- エ 何のために名前を呼ばれたかわからなかったから。

問八 — 線部⑥ 「手の内側に汗がにじみ、ほうきをぎゅつと強く握りしめる」とありますが、このときの「私」の気持ちとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえに変に思われることが、たまらなく、たえきれなかった。

イ たとえにはつきり嫌われてしまったことをとても悔やんでいた。

ウ たとえのそっけない反応に対して不安を感じ、緊張していた。

エ たとえの返事が予想外だったので困惑し、ぼう然としていた。

問九 — 線部⑦ 「違う用法のたとえ」とありますが、この用法の「たとえ」を用いた短文を、二十字以内で自分で考えて答えなさい。

問十 — 線部⑧ 「甘くて淡い、ほのかな酸味の桜色のお酒が、泡をしゅわしゅわ立てて胸に満ちてゆく」とありますが、これはどのようなことをたとえた表現ですか。本文中のことばを用いて三十字以内で説明しなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先日、ひさしぶりでヘレン・ケラーの映画『奇跡の人』を見ました。一九六二年公開の映画ですから、今から五十三年以上前に作られたということになります。見た人もいるかもしれませんが、話には聞いたこともあるかもしれません。この映画の印象的な場面は、なんとと言っても、耳が聞こえず、目も見えず、口もきけないヘレンが、サリバン先生と出会い、最後にものには名まえがある、ということを理解するところです。ウォーターと言おうとして、ウォ、ウォ、と言いつつ出るところです。そこもほんとうに感動的なのですが、今回、べつ①のことがとても印象に残りました。

サリバンさんと出会う前の彼女は、だれともコミュニケーションがとれない、閉ざされた世界にいたわけですから、まるで動物と同じで、いえ、動物も、群れのなかでマナーのようなものを教わって、そのなかのルールに従って行動するけれども、彼女は、そういう、人と生きる上でのルールのようなものを教わることができなかった。自分の思うようにならないとかんしゃくを起こして手が付けられなくなるので、みな、彼女を刺激しないように接していた。食事のときに椅子に座らないのはもちろん、歩き回って好き勝手にだれかの皿から手づかみで好きなものを取って食べるようなことをしていた。彼女に対する愛情と哀れみと諦めが、結局彼女をだめにするんだと言って、サリバン女史は、二人きりで食堂にこもり、何時間もの凄まじい取っ組み合いの末、とうとう彼女に椅子に座ってスプーンを持たせ、ナプキンを持たせ、涙ぐみながら成功した。はらはらしながら外で待っていた母親は、彼女がナプキンをたたんだ、と聞いて、感動のあまり涙ぐみます。あの子が、ナプキンを、たたんだ、と、何回か繰り返して口にします。ここもほんとうに感動的でした。母親のそれまでの不安と悲しみまで一度に押し寄せ、ああ、このひとは、たった一人で社会を相手に我が子を守ろうと頑張ってきたのだな、とわかるのです。ナプキンをたたむなんて、言ってみれば、どうでもいいようなことです。けれど、今まで、獣の世界にいた我が子が、ここで、自分たちの群れに帰ってきた、そんな感動が、伝わってくるんですね。群れの一員としてやっていけるかもしれない、という微かな光が見えた瞬間でした。群れに入れない、入れる、それがこんなに絶望と希望を与えるものだということ。理屈ではなく、人間の本能のようなところで、それは生死を分けるようなものなのでしょう。個人の主義主張とは関係なく、それは、もう、どうしようもなく。

A、みなさんのなかで、一匹狼でやっていけない自分、仲間に入れてもらおうと卑屈になる自分、ということに嫌気

がさしているひとがいたとしたら、仲間に入れてもらいたいと思う気持ちは、あたりまえのことなのだと言えたいです。それは、私たちの本能なのだから、と。

問題は、それが自分のほんとうに入りたい「群れ」や仲間でないのに、^④そういう人間の本能に急かされて、犬が上位の犬の機嫌をとろうとしてお腹を見せてひっくり返るような行動をとってしまうときの、自己嫌悪感、ですね。

B 言えるのは、生きるってそういう葛藤の連続ってこと。心から思っている言葉でないこと、相手を褒めるときも、自分がそう思っていたらいいんだけど、思ってもないのに、つい、相手の機嫌をとるようなことを言ってしまったたり、やってしまったときの問題。

そういう自己嫌悪に陥ってしまったら、それは若い頃はありがちなことなので、ああ、やつちやつたよー、しょうがないなあ、って、心のなかでためいきをつけていればいいのです。まあ、しかたがないです。

C、それはだれにもわからない。それがわかっているのは、あなたしかいません。あなたのなかで、自分を見ている目がある。いちばん大切にしないといけないのは、そしてある意味で、いちばん見栄を張らないといけないのは、いいかつこしいといけないのは、じつは、他人の目ではなく、この、自分のなかの目です。

D、ここから大切なことです。

そのとき、ああ、やってしまったよーとか、しょうがないなあ、とか、ためいきついているひとはだれ？

だれよりもあなたの事情をよく知っている。両親よりも、友達よりも、いわんや先生たちよりもあなたのことをすべて知っている。あなたが、そういうことをせざるをえなかった、あなたの人生の歴史についてだれよりも知っている。しかも、あなたの味方。いつだって、あなたの側に立って考えてくれている。

そう。あなたの、ほんとうのリーダーは、そのひとなんです。

それはさつき私が言った、「**⑥**」、でもあります。同じひとです。そのひとにぴったりついていけばいい。

自分のなかの、埋もれているリーダーを掘り起こす、という作業。それは、あなたと、あなた自身のリーダーを一つの群れにしてしまう作業です。^⑦チーム・自分。こんな最強の群れはない。これ以上にあなたを安定させるリーダーはいない。^⑧これは、個人、ということですよ。

そして、群れというのは本来、そういう個人が一人ひとりの考えで集まってできるものであるべきだと思っています。個人的な群れ、社会的な群れ、様々な群れがありますが、それに所属する前に、個人として存在すること。盲目的に相手に自分を明け渡さず、考えることができる個人。

じゃあ、どうやったら個人でいつづけられるか。自分のなかに自分のリーダーを掘り起こすって、どうやって？

一つには、自分でも受け入れ難いことをやってしまったとき、ああ、やっちゃったよーとか、自分を客観視する癖をつけることです。批判する力をつける。様ざまに批判する力をつけるなかで、自分自身にももちろん、批判する目を向ける。批判って、難癖なんくせをつけるとか、文句ばかり言う、ということとは違います。正しい批判精神を失った社会は、暴走していきます。批判することは、もつとよくなるはずと、理想を持っているからできること。社会を愛する気持ちと反対のものではないのです。客観的な目を持つ。つまり、そういう視点から自分をも見つめる、筋肉のようなものをつける。その目は自分をよく見ているから、自分にできないような無理な要求はしない。ちよつと頑張ったらできるはず、という線が引ける。頻繁ひんぱんにそういうことをしているうちに、それはできます。それを意識するということがつまり、今言うところの、掘り起こす、という意味。そしてその目が、あなたのリーダー的役割をするものになる。

(梨木香歩『ほんとうのリーダーのみつけかた』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の の中に入る語として適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア でも イ ます ウ ですから エ さて

問二 — 線部①「べつのこと」とはどのようなことですか。四十字以内で説明しなさい。

問三 — 線部②「今まで獣けものの世界にいた我が子が、ここで、自分たちの群れに帰ってきた」とはどのようなことですか。たとえの表現を使わずに、四十字以内で説明しなさい。

問四 — 線部③「それ」の指す部分を、「ということ」につながるように本文中から抜き出して答えなさい。

問五 — 線部④「そういう人間の本能」とは何を指すか、本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 — 線部⑤「それ」が指しているものは何か、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 本文中の ⑥ にあてはまる語句を、本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問八 — 線部⑦「チーム・自分」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どんな時でも自分を正しいとみとめ、応援おうえんしてくれるもうひとりの自分をリーダーとして持つこと。
- イ どんな相手であつてもよく見て合わせていき、仲間と自分とでうまくチームを作っていること。
- ウ 自分自身を見つめるもうひとりの自分を常に持ち、そのもうひとりの自分をリーダーとすること。
- エ 他人に意見を求めず、自分の力だけでどんなことも判断し進めていく自分ひとりのチームのこと。

問九 — 線部⑧「個人」とありますが、本文中で述べられた「個人」の説明としてあてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身を見つめ直す視点を常に持っている人間のこと。
- イ さまざまな組織に属する、ひとりひとりの人間のこと。
- ウ 何よりも優先して自分の利益を大切にする人間のこと。
- エ 人間社会でのルールやマナーを身につけた人間のこと。

問十 ——線部⑨「自分のなかに自分のリーダーを掘り起こすって、どうやって？」とありますが、この問いに対して筆者が必

要だと述べていることはどんなことですか。あてはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の可能性を信じ、何事もあきらめずに最後まで理想を追い求めていくこと。
- イ 他者に対して批判する力と同様に、自分自身に対しても批判する力を身につけること。
- ウ 自分が失敗した時に、落ち込まずに明るく前向きに受け止められるようになること。
- エ 自分のことよりも他者や社会を優先して愛する気持ちを、常に持つようにすること。
- オ 自分自身を客観的に見る癖をつけ、他者に対しては文句を言わないようにすること。

問十一 ——線部⑩「それ」の指す内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ちよつと頑張がんばったらできるはず、という事柄ことば。
- イ 社会を愛する気持ちや理想。
- ウ 自分を客観視する癖をつけること。
- エ 自分のなかに自分のリーダーを掘り起こすこと。

三次の短文中の——線部のカタカナを、漢字になおしなさい。

- 1 はなばなしいケイレキの持ち主。
- 2 技術のカクシンはすばらしい。
- 3 家のモケイをつくる。
- 4 会社のギョウセキが回復する。
- 5 ノウリツよく仕事を^{する}。
- 6 想像をゼツする世界。
- 7 物資をユソウする。
- 8 あまりにもヒンジャクな発想だ。
- 9 たいへんなキキを^{むか}えた。
- 10 手先がキヨウな人。

